



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Sholeh Quinn, Persian Historiography across Empires : The Ottomans, Safavids, and Mughals, Cambridge: Cambridge University Press, 2021, 252 p.
Author(s)	諫早, 庸一; ISAHAYA, Yoichi
Citation	日本中央アジア学会報, 17, 47-54
Issue Date	2021-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.17.47
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89134
Type	journal article
File Information	JB017_014isahaya.pdf



**Sholeh Quinn, *Persian Historiography across Empires:
The Ottomans, Safavids, and Mughals*,
Cambridge: Cambridge University Press, 2021, 252 p.**

諫早 庸一

本稿は2021年に刊行されたショール・クイン著『帝国をまたぐペルシア語歴史叙述——オスマン朝・ムガル朝・サファヴィー朝』の書評である⁽¹⁾。著者のクインは、シカゴ大学で博士号を取得し、現在はカリフォルニア大学マーセド校で教鞭を取っている。すでにサファヴィー朝史の分野で2冊の単著を上梓している彼女であるが [Quinn 2000; 2015]、最新作である本書のペースケティブはサファヴィー朝(1501～1722年)に留まらず、副題にある通り、オスマン朝(1299～1922年)、サファヴィー朝、ムガル朝(1526～1739年)という近世期のイスラム圏に鼎立した三帝国に広がる。以下、まずは本書の構成に沿ってその内容を概観していきたい。

第1章と番号付けられた序章においては、本書の枠組みが述べられる。ティムール朝(1370～1507年)崩壊の後、16世紀の初頭に権力基盤を形成した近世(early modern)の三帝国は、17世紀にはユーラシアで最も有力な勢力群となる。これら三帝国は王権や支配の正統性を巡って相争う一方、イスラム圏の近世は帝国の領域を超えて移動・交流・統合が高度に実現された時代でもあった。行き交う人々はまた、その心身に信仰・技芸・詩・史書をまとい、行き先の文化に影響を与えることになる。そのなかでもクインが扱うのは、近世期においてこれら三帝国の境域を越えて広がっていたペルシア語歴史叙述(Persian historiography)の伝統である。序章においてクインは、本書の力点がペルシア語史書群の歴史的な文脈(historical context)以上に、歴史叙述的文脈(historiographical context)にあることを強調している。

そして第2章「継続と変容——ティムール朝歴史叙述の遺産」においては、近世三帝国のペルシア語歴史叙述に文脈を提供する、ティムール朝歴史叙述に目が向けられることになる。この章で特に注目されるのは王朝の始祖ティムール(治世1370～1405年)の伝記であるシャラフ・アッ＝ディーン・ヤズディー『勝利の書(*Zafarnāma*)』(1435/36年)と、同王朝後期の普遍史(universal histories)であるミールホンド『清浄園(*Rawḍat al-ṣafā'*)』(1497年)である。

(1) 本書評とは視角が大きく異なるが、本書の内容のまとめは評者 Researchmap 上の「研究ブログ」にもアップされている (https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/111314/1876aa4e5458ff9710fd5589aab01f1?frame_id=644859)。

近世期のペルシア語叙述家たちは、これら2書に顕著なティムール朝歴史叙述の遺産から叙述のスタイルを汲み出していた。そのことをクインは特にペルシア語史書の序文に見える4つの構成要素、1) 歴史の効用、2) 書誌、3) 系譜、4) 夢語り、から読み解いていく。近世期のペルシア語叙述家たちは時として先代の叙述を引き写しながら、時としてそれを消去・縮小・改変・追記することで、自らのペルシア語歴史叙述を彫琢していった。

叙述スタイルの形成に続いて第3章「流転する歴史叙述と歴史家たち——12という数字の意義」では、そうしたスタイルの変化が歴史家の移動とともに語られることになる。特に焦点が当てられるのはギヤース・アッ=ディーン・ムハンマド・ハーンダミール(1535/36年没)である。彼はティムール朝の末期に首都ヘラートの文芸サークルに属していたが、1510年におけるサファヴィー朝始祖シャー・イスマーイール(治世1501～24年)のヘラート占領後もしばらくその地に留まることになる。1527年にヘラートを離れカンダハールに向かった彼は、そこからさらにインドに向かいムガル朝始祖のバーブル(治世1526～30年)の宮廷へと赴く。まさに彼はティムール朝歴史叙述の遺産とともに帝国間を移動し、サファヴィー朝とムガル朝双方の帝国においてペルシア語で史書を編んだ歴史家であった。ハーンダミールはサファヴィー朝下で『伝記の伴侶 (*Ḥabīb al-siyar*)』(1524年)を完成させた後、バーブルの死後に皇帝となったフマーユーン(治世1530～40年、55～56年)に史書『フマーユーン典範 (*Qānūn-i humāyūnī*)』(1534年)を献じている。両史書を精査したクインはその双方で重視されている12という数の持つ意味の変化に注目している。この12という数字は『伝記の伴侶』においてはもちろん12イマーム派のメシアたるシャー・イスマーイールを象徴する数字であったわけであるが、『フマーユーン典範』においては宇宙論と結び付けられて帝王たるフマーユーンを飾っている。

第4章「世界最初の王——普遍史におけるカユーマルス」で扱われるのは普遍史である。それは天地創造から著者の時代までを語る史書ジャンルの1つであり、近世三帝国のなかでも書き継がれていく。そのなかでクインが光を当てるのは、イスラム化以前の古代イラン史における「最初の王」——時として「最初の人間」——たるカユーマルスである。ペルシア語普遍史においては旧約的世界観と古代イラン史との接合が図られ、例えばカユーマルスのようなイラン史の神話的个人も聖書の預言者たちの系譜のなかに組み入れられていく。カユーマルスを預言者系譜の何処に組み入れるかに関しては多説が存在しており、その記述には歴史家ごとに幅があった。例えばハーンダミールは、カユーマルスをノアの子であるヤベテの子とする祖父ミールホンドの挙げる説を削除したうえで、彼を同じくノアの子であるセムの子とする説を新たに入れていく。ヤベテは伝統的にテュルク人の祖とされており、一方でセムがペルシア人の祖とされている事実を踏まえ、クインはこの書き換えをカユーマルスの系譜を「ペルシア化する (*Persianizes*)」ことであると見做す。サファヴィー朝において普遍史は

やがて王朝史に代わられ、古代イラン史の叙述に割かれるスペースも少なくなっていく。例えばサイフィー・カズウィーニー(1555年没)やガッファリー(1567/68年没)といったサファヴィー朝史家たちの普遍史では、カユーマルスが息子スィヤーマクを殺した悪魔(*dīw*)たちに復讐を果たすという説話が削除され、史書を「脱神話化すること(*de-mythologizing*)」が図られている。この種の古代神話は、シャー・タフマースプ期(1524~76年)作成のフィルダウスィー『王書(*Shāhnāma*)』(1010年)の写本画のモチーフとなるなど、別ジャンルの作品に編入されていくのである。しかしこうした「脱神話化」が近世期の歴史叙述のトレンドであったわけでは必ずしもなかった。ムガル朝普遍史の1つであるサブザワリー『清き者たちの園(*Rawḍat al-tāhirīn*)』(1605/06年)においてはむしろ、『王書』や『清浄園』を典拠として神話的叙述が展開されている。

普遍史におけるカユーマルスという〈共通の過去〉についての第4章とは対照的に、第5章「鑑と覚書とジャンルの混合」においては三帝国の〈それぞれの過去といま〉とが主題となる。それらについての語りをクインは、近世期の歴史叙述がそのうちに取り込んでいく2つのジャンルに典型的に現れるものと見ている。それら2つとは具体的には、理想の王の美質を語る君主鑑と詩人のような人物の伝記集(*tazhkira*)である。まずは前者に関して、クインはムガル朝カンダハーリー『アクバルの歴史(*Tārīkh-i akbarī*)』(1580年)とサファヴィー朝イस्कन्दル・ベグ・ムンシー『世界を飾るアッバースの歴史(*Tārīkh-i 'ālamārā-yi 'abbāsī*)』(1629年)とを題材とする。双方ともにアクバル(治世1556~1605年)とシャー・アッバース(治世1587~1629年)という、それぞれの王朝の盛期を現出した王のための史書についてクインは特に、それぞれの王の17年目の治世——前者では1573年から、後者では1603年から——の記述に着目する。それは、アクバルがグジャラート征服を、シャー・アッバースがタブリーズおよびアゼルバイジャン平定を達成した年であった。それぞれの史書はその箇所において、軍事勝利の記述に並行して、〈いま〉の主君に備わった勇猛さや知略のような美質を謳い上げているのである。

もう1つのジャンル編入の試みとして挙げられている人物伝について、『宰相列伝(*Tazhkira al-wuzarā'*)』をティムール朝君主フサイン・バイカラ(治世1470~1506年)の宮廷で著わしたハーンダミールは、『伝記の伴侶』において王ごとの治世における著名人についての伝記集を編入した。こうした人物伝編入の伝統はムガル朝史家たちに連綿と受け継がれており、その目的は主として〈いま〉の主君の宮廷にいかにか綺羅星の如き人材が集っているかを示すことにあった。例えばニザーム・アッ=ディーン『アクバル史集(*Ṭabaqāt-i akbarī*)』(1593年)のなかの伝記集においてイランからの学者たちの到来が強調されるのも、このような文脈から理解することができる。一旦は人物伝編入の伝統を途絶えさせるサファヴィー朝にしても、シャー・アッバース期にはイस्कन्दル・ベグ・ムンシー(1633年頃没)が自らの史書に伝

記集を組み込んでいる。彼は『伝記の伴侶』の構成を大いに意識し、また同じく伝記集を組み込むアブー・アル＝ファドゥル『アクバルの書 (*Akbarnāma*)』(1602年)に言及している。

第6章と番号付けられた結論部においてクインはこれまでの諸章の要点をまとめつつ、ここまで扱ってきた近世期の史家たちのいずれもが「独りで」叙述を為していたわけではないことを確認する。『清浄園』のようなティムール朝期の史書は三帝国のそれぞれで広く読まれ、この時代の史家たちに叙述のモデルを提供していた。近世期の史家たちはこれらを範としつつ、自らの情報やアジェンダに沿って歴史叙述を組み上げていった。本書で扱われたペルシア語史書群はその意味において、いずれも高度に政治的かつ動態的なテキストなのだとクインは結論部を締めくくっている⁽²⁾。

近世のペルシア語文化圏の歴史を、ペルシア語歴史叙述の伝統の共有という観点から、政治境界に縛られることなく論じ切った本書はまさに、第1章でクインが本書の枠組みとして言及していたところの「ペルシア語文化圏 (Persianate world)」における「接続された歴史 (connected histories)」の1つの形を示したものであると言える。クインのこれまでの作品との比較という点に関して言えば、彼女の最初の著作である「シャー・アッバース治世の歴史叙述——サファヴィー朝年代記におけるイデオロギー・模倣・正当性」[Quinn 2000]に対する書評において小笠原弘幸は、サファヴィー朝とムガル朝とにおける歴史叙述の面での影響関係についての議論がやや性急であり、ティムール朝やオスマン朝のものとも比較が必要であることを指摘していた [小笠原 2001: 64–65]。本書においては、ティムール朝歴史叙述の伝統についての議論はもちろんのこと、オスマンとシャー・イスマーイールといういずれも帝国の創始者の夢語りに見える剣のモチーフや [本書: 67]、アクバルとシャー・アッバースといういずれも帝国の盛期を現出した王の表象に見える共通性など [本書: 167–173]、近世期における政治領域を超えた横断的なペルシア語史書叙述の具体相が提示されており、この点において研究は確実に深められていると言える。

それでは、近世三帝国を切り結んだその「接続」は中央アジアをも繋ぐものなのであろうか。次にその点について考えてみたい。中央アジアはもちろん、これら三帝国のような巨大な政治体を近世において生み出すことがなかった。しかしその一方で、この地域においてもペルシア語歴史叙述の伝統が継続しており、さらにそれらは近世三帝国同様にティムール朝歴史叙述の遺産を利用したものであった。クインは、第2章において扱ったペルシア語歴史叙述に見える4つの構成要素の全てを含むものとして、16世紀の中央アジアを代表するペルシア語史書であるミールザー・ハイダル『ラシードの歴史 (*Tārīkh-i rashīdī*)』(1546年)を挙げてい

(2) 本書においては結論部の後に「年代史家と年代記」と題された付録が続いており、ここでは分析対象となった年代記について、著者名およびタイトルに加えてチャールズ・ストーリーおよびユリー・ブレーゲルのペルシア語文献目録 [Storey 1927; Bregel 1972] における番号が提示され、年代記そのものに対する紹介が添えられている [本書: 208–221]。

る。一方で中央アジアの史書の特徴の1つとして、第4章においてはシャイバーニー朝期のペルシア語普遍史であるクーヒスターニー『アブー・アル＝ハイル・ハンの歴史 (*Tārīkh-i abū al-khayr khānī*)』(1540～51年頃)が取り上げられ、そこに見える『王書』への強い関心が、トゥランを統べる者としてのイランを統べるサファヴィー朝への対抗意識として読み解かれている [本書: 136]。

さらに、本書を例えばロン・セラによる『ティムールの書 (*Tīmūrnāma*)』についての中央アジア歴史叙述研究と対比させて読むことで、この地域におけるペルシア語歴史叙述の独自性も浮かび上がらせることができるように思われる。中央アジアの英雄たるティムールを主人公とする物語は、1405年の彼の死からそれほど時を置かずして、サファヴィー朝、ムガル朝、オスマン朝いずれの領域でも書かれることになるが——有名な偽書である『ティムールの言葉 (*Mulfūzāt-i tīmūrī*)』がインドで現れるのは1630年代のことである——彼の本拠地であった中央アジアにおいてその成立は遅れる。件の『ティムールの言葉』が中央アジアに広がるのはようやく19世紀になってからなのである。それは、ティムール朝を打倒し中央アジアを統治したウズベクの政権がむしろ、ティムール以外に支配の正統性を求めた結果であるとセラは読み解いている [Sela 2011: 2-7]。『ティムールの書』なる中央アジア各地で現在に至るまで好評を博している「英雄外伝 (heroic apocrypha)」が出回るのはようやく18世紀初頭になってからであり、それは諸帝国のはざままで深刻な政治・経済危機に喘ぐ中央アジア——特にブハラ——の人々が希求した物語であった [Sela 2011: 117-140]。こうした研究と本書とを組み合わせて用いることで、中央アジアを対象とした歴史叙述研究が新たな展開を見せる可能性は大いにあるように思われる。

ただしこうした価値に並行して、この「接続された歴史」を支える史料批判の実践と、クイン自らが要諦だと強調している「歴史叙述的文脈」に対する理解については、いくつかの問題を提起できるように思われるので以下に見ていくことにしたい。まずは史料批判に関して、例えば小笠原弘幸や大塚修による歴史叙述研究が刊本はもちろんのことその写本群を網羅的に考察に付しているのに対し [小笠原 2014; 大塚 2017]、クインの研究には写本校合の考察がほぼ皆無となっていることは一驚に値する⁽³⁾。もちろん、彼女自身が例えば近世ペルシア語歴史叙述の源泉の1つともなった『清浄園』に関して述べるように、その写本は世界に500以上も現存しており [本書: 28]、これに関して言えば、総合的な史料分析を要求することは無いものねだりの域を出ないのかもしれない。しかし、例えば上述の『ラシードの歴史』に関して、クインは疑問なくウィラー・サックストンの校訂英訳を用いて議論を進めている [Thackston 1996]。間野英二に拠れば、極めて多数の写本が残る同書に関してサックスト

(3) クイン自身も本書の結論部の最末尾に記した「将来の研究」において、写本や図書館の調査を今後の課題として挙げている [本書: 207]。

ンは僅かに2つの、それもやや特異な系統に属する写本を利用しているにもかかわらずである〔間野 2001: 241〕。もちろんこの指摘に関しても、サクストン刊本を利用しているがゆえの誤りを評者が見出しているわけではないので、彼女の分析に関しては——特にヤズデー『勝利の書』との対照など——問題がない可能性もある。さらに議論の再検証という観点からすれば、アクセスのしやすい刊本・翻訳を(も)提示することは、好ましくさえあるであろう。

しかし、以下に指摘する点に関しては、こうした史料批判の甘さが本書の議論の精粗にも直接に関わってくるように思われる。ここで対象とするのはオスマン朝史書群である。すでに彼女自身が述べるように、オスマン語での歴史叙述が中心となるオスマン朝に関して、彼女が扱うのはほぼペルシア語史書に限られる〔本書: 12〕。そのうちの1つが、イドリース・ビトリースイー『八天国 (*Hasht bihishi*)』(1502~14年)である。クインはこの史書を〈オスマンの夢〉に関して利用するが、この史書の写本群には2つの系統があることに気付いていない⁽⁴⁾。オスマン朝古典期(建国から16世末まで)の王朝起源論を王朝史書の総体的な分析によって解き明かした小笠原が明らかにするように、『八天国』はオスマン王家がその始祖とするオグズ・ハンの長孫カユと『旧約聖書』に登場するイサクの息子エサウとを同一視するという意味でオスマン朝歴史叙述の伝統に重要な位置を占める。さらに2系統の記述の違いに注目することで、それが同一視されるに至った過程を跡付けることができるのである〔小笠原 2014: 68-78〕。クインがこうした写本間の異同により意識的であれば、コンスタンティノープル征服がオスマン朝系譜意識に与えた影響や、その後のカユーマルスについての分析にもより深みをもたらされたであろう。オスマン朝、ムガル朝、サファヴィー朝の近世三帝国が副題で——かつこの順序で——並置されているものの、ペルシア語歴史叙述を扱う本書としては当然ながら後二者に比重があり、そのことが内包する問題をも上述の点は示しているように思われる。

次にクインがこの本で最重要視する「歴史叙述的文脈」についてであるが、カユーマルスについての第4章でクインは、前近代ペルシア語文化圏の普遍史叙述に関して2つの画期を挙げる。1つ目が8世紀中葉、アッバース朝の書記官であったイブン・ムカッファア(721~57年頃)によるサーサーン朝正史『王の書 (*Khudāynāma*)』のアラビア語翻訳とその後、9世紀におけるイブン・クタイバ(828~89年)やアブー・ハニーファ・ディーナワリー(894~

(4) 今澤浩二は『八天国』の写本分析を行い、この史書には1507/08年頃にバヤズィト2世(治世1481~1512年)に献上されたものと(E系統)、それを書き改めて1513/14年頃にセリム1世(治世1512~20年)に献上されたものの2つがあることを指摘した(H系統)〔今澤 2002; 小笠原 2014: 72〕。クインは『八天国』の読解にあたってイスタンブールの2写本を利用しており(Ayasofia 3541; Nurosmaniye 3209)、前者がE系統、後者がH系統にあたる写本であるので、一見双方の系統を押さえているかのように見える。しかし、クインがこうした変遷を踏まえていないことは、この史書の編纂年代を908/1502年としてしまっていることから明らかである〔本書: 65〕。

903年頃没)によるその利用である。2つ目は、サーマーン朝君主マンスール・ブン・ヌーマーン(治世 961～76年)治下でのアブー・アリー・バルアミー(992～97年頃没)によるタバリーの史書『預言者と王の歴史 (*Ta'riḥ al-rusūl wa al-mulūk*)』(915年以降)の「翻訳」となっている[本書: 107]。しかし、ペルシア語文化圏の普遍史叙述をティムール朝中期まで総体的に分析した大塚は、この〈定見〉を覆す。彼に拠れば、イスラム圏の普遍史叙述における古代ペルシア史の〈種本〉を『王の書』とそのアラビア語訳とする説には明確な根拠がなく、その受容により重要な役割を果たした史書として、よりマイナーなハムザ・イスファハーニー『王と預言者の年代記 (*Kitāb tawārīḥ sinī mulūk al-arḍ wa al-anbiyā'*)』(961年)が挙げられる[大塚 2017: 16–105]。画期の2点目に関しても、大塚はバルアミーによる天地創造の記述を根拠に、彼が直接参照したのはハムザの年代記であり、イブン・ムカッファアによる『王の書』のアラビア語訳は利用されていないことを論じている[大塚 2017: 82–90]。ペルシア語圏の普遍史叙述をめぐる歴史理解はこのように、現在大きく転回しているのであり、クインの普遍史理解は前近代に関してやや旧態然としたものに映る。

末尾において問題点を並べはしたものの、歴史叙述研究という観点からは、小笠原のオスマン朝史書研究や大塚の前近代普遍史研究が主眼とはしていない近世期のペルシア語歴史叙述研究が為されたことの意義は大きい。緻密な史料批判の上でこうした研究を重ね合わせ、中央アジアに関しても個々の史書分析を超えた形での統合的なペルシア語歴史叙述の研究が生み出される日を待ち望む次第である。

参考文献

- Bregel, Yuri. 1972. *Persidskaya literatura: bio-bibliograficheskii obzor*, 3 vols. Moskva: Nauka.
- Quinn, Sholeh. 2000. *Historical Writing during the Reign of Shah 'Abbas: Ideology, Imitation, and Legitimacy in Safavid Chronicles*, Salt Lake City: University of Utah Press.
- Quinn, Sholeh. 2015. *Shah 'Abbas: The King Who Refashioned Iran*, London: Oneworld Publications.
- Sela, Ron. 2011. *The Legendary Biographies of Tamerlane: Islam and Heroic Apocrypha in Central Asia*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Storey, Charles. 1927. *Persian Literature: A Bio-Bibliographical Survey*, 3 vols. London: Luzac & Co.
- Thackston, Wheeler. 1996. *Mirza Haydar Dughlat's Tarikh-i-Rashidi: A History of the Khans of Moghulistan*, 2vols. Cambridge, Mass.: Harvard University, Dept. of Near Eastern Languages and Civilizations.
- 今澤浩二 2002 「オスマン朝年代記『八天国』の2系統の写本について——イスタンブール所在の写本群をめぐって」『国際文化論集』26、3–28頁。
- 大塚修 2017 『普遍史の変貌——ペルシア語文化圏における形成と展開』名古屋：名古屋大学出版会。

小笠原弘幸 2001「書評：シヨレフ・A・クイン著『シャー・アッバース治世の歴史叙述——サファヴィー朝年代記におけるイデオロギー、模倣、正当性』」、『東洋学報』82(4)、58–66頁。

小笠原弘幸 2014『イスラーム世界における王朝起源論の生成と変容——古典期オスマン帝国の系譜伝承をめぐって』東京：刀水書房。

間野英二 2001『バーブルとその時代』京都：松香堂。

(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)